

# 学校制服にみるスクールアイデンティティー の形成に関する一考察

福岡女学院を事例として

井 上 美香子

## 1. はじめに

学校制服といえばこれまで、服飾史、教育史などの観点から検討がなされてきた<sup>1</sup>。しかし、学校制服をとおして生徒たちが何を感じたのか、また、どのようなスクールアイデンティティーが学校制服によって育まれたのかについては、あまり検討されてこなかった。

周知のとおり、福岡女学院は洋装の学校制服としてセーラー服を初期に導入した学校である。しかし、『福岡女学校五十年史』や『福岡女学院百年史』などこれまでの沿革史ではその経緯を紹介するにとどまり、学校制服の導入が学校や生徒たちにどのような影響を及ぼしたのか、そこで育まれたスクールアイデンティティーとはどのようなものであったのかについては明らかとされていない。そこで本稿では、学校制服の導入をとおしてどのようなスクールアイデンティティーが育まれてきたのか、福岡女学院を事例に考察することを目的とする。

福岡女学院では、1921（大正10）年に第9代エリザベス・リー校長の発案により、学校制服としてセーラー服が導入された<sup>2</sup>。2021年にはセーラー服を導入して100年を迎えることになるが、その間、福岡女学院のセーラー服

は冬服・夏服ともに導入当初からその形をほとんど変えることなく今に至っている。セーラー服を学校制服として導入してから100年を迎える間、どのようなスクールアイデンティティーが作られていったのか、本稿では以下の方法で検討する。

はじめに、福岡女学院における制服の歴史について概観する。次に、学校制服の導入が学校と生徒に及ぼした影響と学校制服に込められた“思い”などについて掘り起こす。最後に、福岡女学院におけるスクールアイデンティティーと制服の関係について検討する。以上をとおして、学校制服の導入を通して育まれてきたスクールアイデンティティーについて福岡女学院を事例に検討したい。

## 2. 福岡女学院における制服の歴史

1885（明治18）年、ジェニー・ギール（Jean M. Gheer）によって英和女学校（後の福岡女学校。1948年に福岡女学院に改称）は創設された。創設当初より生徒の服装は自由であったが、着流しに常に白足袋を履いていたという（図1）<sup>3</sup>。1901年に明治天皇の熊本大演習御統監の行幸を奉迎したときから、全校生徒はいっせいにハカマを着用することとなり、1914（大正3）年には着用するハカマの色が紫色に統一された。

1921年には、第9代校長エリザベス・リー（Elizabeth Meredith Lee 以下、リーと表記する）によってセーラー服が制服として制定された。1915年に校長として着任した彼女は、日本語を話すことがほとんどできなかったことから、言葉の障壁をこえるためにスポーツを通して生徒たちと心を通わせることを思いついた。



図1 着流しに白足袋の生徒たち  
（『福岡女学校五十年史』，1936年）

そこで、彼女は生徒たちと一緒にバスケットやテニスを日々楽しんでいたという。しかし、草履に足袋、着物にハカマ姿の生徒たちの服装はバスケットやテニスなどのスポーツを行うことには適しておらず、危険であると保護者から苦情が出たのであった。そこで、リーは、自身も愛用していた紺色のサージ生地（サージ生地）のセーラー服を生徒たちに着せることを母親たちに提案したのである<sup>4</sup>。

リーは、服装調査委員会を設置し自ら委員長となり欧米各国における女学生の服装を調査研究、1年以上の歳月を要しセーラー服がつくられることとなったのである<sup>5</sup>。

母親たちの了解を得たリーは、早速、テーラーの太田豊吉にセーラー服の製作を依頼した。当時、サージ生地が日本にはなかったため、生地はロサンゼルスから取り寄せ、生徒一人ひとりの体にぴったり合うようにオーダーメイドで作られた。また、ストッキングも日本には無かったためロサンゼルスより取り寄せ、靴はリーが履いていたものを参考に靴屋に依頼して人数分の靴を用意した。さらに、「先生、教会にいらっしゃるときに、帽子をかぶっていらっしゃいますね。折角私たちはこういうよう洋服を作って戴いたのですから帽子をかぶりたいです」<sup>6</sup>という生徒たちの意見を踏まえ、リーが愛用していたセーラー・ハットを参考に帽子の製作を籠職人に依頼し帽子も人数分作られたのである。こうして、1921年12月、セーラー服とベレー帽が制服・制帽として制定されたの



図2 制服・制帽制定当初の女学生（福岡女学院資料室所蔵）



図3 胸当ての碇のマーク

である（図2）。胸当て部分の錨のマークは、リー校長の洋服にあったものをそのまま採用<sup>7</sup>したのであるが、讚美歌280番第2節の「風いとはげしく波立つ闇夜も、みもとにいきりをおろして安らわん」に由来し、信仰を定着させる錨とされた<sup>8</sup>（図3）。

翌年の夏には、朝鮮半島からギンガム生地を取り寄せ夏の制服が作製された。当初、夏の帽子にはつばの広い黒に白の模様がはいったデザインの麦わら帽子が用いられたが、後には厚手の木綿生地による独特の形をした白の運動帽を使用するようになったという（図4）<sup>9</sup>。また、希望者には白いセーラーの上着に紺色のスカートの合服も用意された（図5）。

戦時下になると、男子の国民服の制定に伴い女学校の制服も国民服的スタイルに統一された。制服を有している者はそのまま制服を着用してよいこととなっていたため、上級生のお古の制服を譲り受けるものも多かったという<sup>10</sup>。1943（昭和18）年にはスカートが廃止され、上着は制服を着用し下はモンペを常用することとなった。敗戦後も物資不足は非常に深刻で、制服の生地などほとんどないため、制服を持っている生徒は制服を着用し、それ以外の生徒は私服で間に合わせることとなった。物資も出回るようになってきた1949年には、中学校だけ夏服から一斉に制服を着用することとなり、こうして錨のマークのセーラー服は復活し現在に至っているのである<sup>11</sup>。



図4 白い運動帽を被った生徒たち（昭和10年頃）（福岡女学院資料室所蔵）



図5 合服を着た生徒たち（昭和7年頃）（福岡女学院資料室所蔵）

### 3. 制服の導入が学校と生徒に及ぼした影響

制服の導入は生徒や学校にどのような影響何をもたらしたのであるだろうか。

制服の導入が生徒たちにもたらした一つの変化として、身体活動の変化をあげることができる。和装から洋装への変化に伴い、生徒たちは洋装に適した歩き方を習得することが必要となったのである。

『福岡女学院75年史』によると、セーラー服を導入したその年には、洋装に適した歩き方を学ぶための“ウォーキング”と呼ばれる歩行訓練の時間が設けられるようになったという。毎日、2時間目の授業が終わると全校生徒たちは大急ぎで運動靴に履き替えて運動場に出て二列縦隊や四列縦隊で口の字型に並



図6 ウォーキングの様子  
(福岡女学院資料室所蔵)

び、ピアノの伴奏にあわせて背筋を伸ばし胸を張ってさっそうと歩く訓練が行われた(図6)。この“ウォーキング”と呼ばれた歩行訓練は毎日15分程度行われた。この“ウォーキング”は体育の時間にも行われ、体育館では頭の上に本をのせて歩行訓練を行ったという<sup>12</sup>。この日々の“ウォーキング”のお陰で、背筋を伸ばしてさっそうと歩く姿に“ミッションの生徒は街を歩いていると直ぐわかる”とよくいわれたそうである<sup>13</sup>。

また、福岡女学校の制服が人々の目を引いたことは、当時の新聞記事などから伺い知ることができる。たとえば、1922(大正11)年の福岡日日新聞では、福岡女学校を皮切りに福岡県下の女学生や小学校の制服の洋装化がすすみつつあることを紹介している<sup>14</sup>。その後も女学校の服装の洋装化の記事では福岡女学校に言及している記事がみられ、福岡女学校の制服に対する福岡の人々の関心の度合いをうかがい知ることができる。

福岡女学校の教員をしていた藤川栄氏は、「銀座の街を一人の福女の生徒が制服姿で歩いていた時、銀座ガールたちが何人も振り返って、その姿に見とれ、そして口々に、「いいわねー、いかすわ…」と云っているのを見て、私もこの制服を着たんだと、懐かしく、そして誇らしく思いました」と書かれた手紙を卒業生からもらったことを記している<sup>15</sup>。

さらに1922年に大正天皇の皇后である節子陛下が福岡へ行幸した際、以下のような出来事があったという。

大正十一年九邇宮良子女王（現在の皇后陛下）がご来福された際、ご宿泊にあてられていた浜町、黒田別邸に向かわれる途中の沿道、東中洲一帯には奉迎の市民にまじって各女学校の生徒が整列、本校の生徒は新しく制定された制服に身をかため中洲の橋付近に隊列を整えてお迎えをした。当時、本校の物理数学担当の正宗千香教諭は、たまたま、良子女王が学習院在学時代の教師であったところから、後で、女王をご訪問、ご歓談されたという。そのお話の中で『先刻出迎えの女学生の列に紺のセーラー服に赤ラインの入った制服を着ていた生徒達があったが、あれはどこの学校の生徒か』というお尋ねがあったそうである。これは、本校の生徒の姿が特に女王のご注目をひき、よい感じを持たれたのであった、ということを実教諭が話された<sup>16</sup>。

このように、洋装を先取りした学校として様々な人々の関心を引くなかで、そのスタイルから立ち振る舞いまでが常に注目されているという自負や誇りが生徒たちのなかに芽生えていったことが想像される。

勿論、錨のマークに対する生徒たちの思いにも目を引くものがある。たとえば、第30回卒業生の降矢あき氏は「制服の思出」と題し、卒業にともない制服に付されていた錨のマークを取ってしまっても「福岡女学校に学んだものの心の錨がどこにおろされて居るか、それは神様が知っていらっしゃる」<sup>17</sup>と記している。

戦後物資が不足していたため福岡女学校では私服の着用も認められていたなか、空襲などで制服が焼けてしまった生徒たちのなかには、知人から他校

のセーラー服を譲り受け胸当てに錨のマークを刺繍して着用していたものもいたという<sup>18</sup>。このように、セーラー服の胸当てに付された錨のマークは、生徒たちにとって、まさに福岡女学校の生徒であることの象徴だったといえる。

また、福岡女学校では、洋装の制服としてセーラー服を制定した後、このセーラー服に対してさらなる意味合いを込めていくこととなる。1928（昭和3）年には、創立記念日を祝う際に、生徒たちは一斉に冬服から夏服に衣替えをするようになったのである<sup>19</sup>。さらに、セーラー服のネクタイも、冬服のエンジ色、夏服の黒色のほかに、元日や祝祭日、卒業式



図7 卒業式の日白色のネクタイ姿の生徒たち（昭和12年）（藤川栄『斑入の龍舌蘭』、私家版、1980年、14頁）

など特別な日に着けるための白色のネクタイも作られるようになった<sup>20</sup>（図7）。このように、冬服から夏服への衣替えや特別な日だけに身に着けるネクタイの存在をとおして、学校生活での節目や卒業など、生徒たちの人生の節目を伝える役割がセーラー服にこめられていったのである。

#### 4. 受け継がれていくセーラー服への“思い”

こうして育まれてきた制服に対する誇りや思いは、総合学園を目指して1960（昭和35）年に校地を平尾から臼佐へ移した後も受け継がれていくこととなる。

たとえば、①井口和子氏（1993年当時中学1年生）と②竹山郁子氏（1993年当時中学1年生）の文章から福岡女学院のセーラー服に対するあこがれと特別な思いをうかがい知ることができる。

①私は、入学する前からずっとこの福岡女学院の制服が来たくてたまりませんでした。

小学校も制服だったけれど女学院のセーラー服みたいにかわいくありませんでした。

創立記念の数日前に私は、楽しみにしていた水色のセーラー服をもらい、その日家に帰ってすぐ制服を着てみました。鏡の前に立ってみると今までよりずっと中学生らしく見えました。制服をもらった日から毎日私は、制服を着てみました。そしていよいよ創立記念日になりました。私が教室に入った時には、もう大勢の人が来ていて、みんなとっても制服が似合っていました。私はその日、何度も鏡の前に立ってみては、やっぱり中学生らしくなったなあとしみじみ思いました。

帰る前にハウエル先生が、「制服がとっても似合ってるよ」と言ってくださいました。私はこの日何度も、この学校に入れてよかったなあと思ったのでした<sup>21</sup>。

②すてきな一日が始まる。朝、起きるのがいつもより早かった。なぜなら、制服が着れるからだ。空色に黒のネクタイ。足の見えないスカート。小学校の一年生の時みたいに着たい。うきうきしている。

いそいで家を出た。だれかに、この制服を見てもらいたかった。人に会おうたびに、なんだかどきどきした。はずかしかった。学校について、講堂に入り、いすにすわる。友達とはしゃぎあいながら、話を聞く。じっとしてられない。ハンドベルを聞く。いつもながら心がおちついた。

そして、はじめてみる、メイポールダンス。二年生の人たちが、キレイにあんでいく。あみ目をじっと見ていると、目が回ってしまう。仕組みがよくわからない。わたしも、これをおどるんだと思うと、胸がワクワクして、早くやりたいと思いついた。クイーンの登場。白いドレスに白いレース。横にいた一年生が小人のようでかわかった。

これで行事がおわった。友達と電車に乗って家に帰る。そして、すてきな一日が終わった<sup>22</sup>。



また、③松尾由紀子氏（1980年当時中学1年生）と④矢野敏子氏（1989年当時中学1年生）からは、セーラー服を福岡女学院の生徒らしく着こなそうとする姿勢やセーラー服を着ることで、自身の成長を自覚する様子が垣間見られる。

③「新しい制服」それは、私達にとってかけがえのない、中学生になったという事を主張しているものである。

私は小学校の時は、私服で毎日何を着ていこうか、これを着ていったら暑くはなかるうか、など考えて、毎朝が母とけんかだった。だから私も母も「早く中学になって制服を着るようにならないかんねえ」といつも話していた。入学式の時は、私服だったので中二、中三の人が着ている制服がうらやましかった。

そして今、こうして女学院の制服を着て、毎日学校へ通っているのである。はじめはネクタイの結び方がうまくいかず、遅刻寸前になった時もあった。でも制服を着ると自分がちょっぴりえらくなくなったような気分になる。家に帰っても弟たちに今日あったことなどを話していい気分になったりする。

試験が近づくと「中学はきついな」など思うけれども、ハンガーにかかっている制服を見ると、なんだか制服が「がんばりなさい。あなたは女学院の生徒でしょう。そして、この制服を着ていっているでしょう」と言っているみたいに思えて、私は「がんばろう」という気になる。

あたらしい制服とは、心を新しく、満足にするだけでなく、へこたれた時のほげみにもなるのだと思った<sup>23</sup>。

④今でもまだ信じられない。入学した時は制服を早く着たいとムズムズしていた。そしてカレンダーに“セーラー服まであと〇日”とつけて毎日夜に×印をつけていった。きのうの夜はうれしくてうれしくてたまらなかった。お風呂で体をねんいりにみがいた。そして朝。みんながこっちを注目しているように思えた。人がこちらを見るたびにうれしい気持ちがかみあげてきた。「やっと中学生らしくなった」「これからはもうお

姉さんなんだ」と思った<sup>24</sup>。

そして、このセーラー服は、これを着用した生徒たちだけではなく、母親たちにとっても特別な存在となっている。1983年3月に福岡女学院高校を卒業した娘の母親が院長宛に送ったお便りには、「思い出多い制服とのお別れの記念に写真館に寄り、右側に冬の制服、左側に夏の制服でアルバムをお願いして参りました。いつの日か嫁ぐ日、聖書とこの写真を添えてあげたいと思います<sup>25</sup>」と書かれていたことが、『福岡女学院時報』に紹介されている。

福岡女学院のセーラー服に対する特別な思いは、時代を超えて生徒たちに受け継がれているのであり、また、親にとってもその子の成長を表す特別な存在となっているのである。

## 5. 福岡女学院のセーラー服とスクールアイデンティティー

福岡女学校および福岡女学院におけるセーラー服の歴史とそこに込められた思いについてみてきた。最後に、戦前に福岡女学校において掲げられた「学校全体の理想」<sup>26</sup>と現在掲げられている福岡女学院が目指す人間像、学院聖句に込められた意味から、セーラー服と福岡女学院のスクールアイデンティティーの関係について触れたい。

1928（昭和3）年、基督教女子青年会（YWCA）と校友会を合併して福岡女学校基督教女子青年会が結成され、これまでYWCAで掲げられてきた「生くる教育」を福岡女学校全体の目標として掲げることとなった。すなわち、「汝、みずからを完成せよ」という信条のもと、宗教教育を根幹として「聖く、正しく、賢く、美しく、強く生くる」ことを普遍的に発達させる教育の徹底を目指したのである<sup>27</sup>。福岡女学院75年史によると、「聖く生くる」とは神とともに歩む信仰を大事にすること。また、「正しく生くる」とは、自己に対し尽くすべき道や義務を正しく理解し行動すること。「賢く生くる」とは、真摯に学習に取り組みその知能を実際の生活に活用すること。そして、「美しく生くる」とは、高潔に生きること。最後に、「強く生くる」とは心

身を強健にして仕事に励むことを示している。

次に、現在掲げられている福岡女学院が目指す人間像、学院聖句に込められた意味についてみてみたい。学院が目指す人間像は「イエス・キリストにつながれて、愛をもって神を畏れ隣人と共に生き、豊かに実を結ぶ人間」とある。また、学院聖句はヨハネによる福音書15章5節によるもので、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたは何もできないかれである」とされている。

戦前に掲げられた「学校全体の理想」と現在の福岡女学院が目指す人間像及び学院聖句は、現在の自分と真摯に向き合い努力することの大切さとともに説いている。ウォーキングの実施や先の生徒たちの文章からは、セーラー服を福岡女学院の生徒らしく着こなそうとする姿勢や、セーラー服を着ることで自身の成長を自覚する様子が垣間見える。これらは、福岡女学院の生徒らしくふるまおうとする“意識”の表れでもあり、まさに、現在の自分と真摯に向き合い努力している姿勢の1つの表れともいえる。このように、福岡女学院のセーラー服は、女学校の時代から現在に至るまで、学校が掲げる目指す理想や思いを生徒たちに伝える大切な存在であり続けているのである。

## 6. おわりに

2010（平成22）年9月22日にTVQ九州放送で放送された『歴史を紡ぐ葡萄の木』には、ともに福岡女学院中学・高校の卒業生で当時福岡女学院大学3年生であった学生2名と2010年現在中学2年生の娘をはじめ親子三代にわたり福岡女学院中学・高校の出身であるというご家族が登場し、福岡女学院のセーラー服について歓談する場面がある。その中で、1955（昭和30）年に福岡女学院高校を卒業した山崎氏は、学院に入学した理由を「父親に「あの制服のところはいいから」と勧められ」、5人いる姉妹すべてが福岡女学院に進学したと話している。この証言は、福岡女学院のセーラー服が、福岡女

学院が目指す教育や理想そのものをも示すシンボルとなっていたことを意味しているといえよう。

福岡女学院のセーラー服は、制定当初とその形をほとんど変えることなく現在に至っており、2021年には制服を制定して100周年を迎える。セーラー服に込められた“思い”や歴史を次代に伝える一助となるべく、福岡女学院資料室では今後もセーラー服に対する生徒たちの“思い”に関する記録を収集していきたいと考えている。

- <sup>1</sup> 唐沢富太郎『女子学生の歴史』（木耳社、1979年）、難波和子『学校制服の文化史日本近代における女子生徒制服の変遷』（創元社、2012年）、昭和女子大学生生活美学科「女子学生の服装の変遷」（『被服文化』77号、1962年）、西村絢子・福田須美子「高等女学校生徒の服装の変遷についての一考察」（『日本の教育史学』32集、1989年）、桑田直子「1920-30年代高等女学校における洋装制服の普及過程」（『日本の教育史学』39集、1996年）、桑田直子「女子中等教育機関における洋装制服導入過程—地域差・学校差・性差」（『教育社会学研究』62集、1998年）、高木明日香「女子中等教育機関の洋装制服の普及過程とその意味—1910年代後半から1930年代を中心に—」（『教育学雑誌』39号、2004年）、刑部芳則「ミッション系高等女学校の制服洋装化」（『総合文化研究』第23巻第3号、2018年）などがある。
- <sup>2</sup> 福岡女学院におけるセーラー服の導入に関する詳細については『ミス・ダイヤモンドとセーラー服エリザベス・リーとその時代』（古川照美・千葉浩美編、中央公論新社、2010年）に詳しい。
- <sup>3</sup> 髪型については、東髪や日本髪を生徒もいた。
- <sup>4</sup> セーラー服の作成などの詳細については、福岡女学院創立86周年記念の際のエリザベス・リーの祝辞に拠る（「リー先生を迎えて」『福岡女学院時報』、第15号、1971年）。
- <sup>5</sup> 福岡女学院五十年史編纂委員編『福岡女学院五十年史』、福岡女学院、1936年、73頁。
- <sup>6</sup> 前掲「リー先生を迎えて」『福岡女学院時報』、第15号、1971年。
- <sup>7</sup> 福岡女学院75年史編集委員会『福岡女学院七十五年史』、学校法人福岡女学院、1961年、45頁。
- <sup>8</sup> 前掲『福岡女学院七十五年史』、45頁。
- <sup>9</sup> 夏の制服、帽子、合服については『福岡女学院七十五年史』（福岡女学院75年史編、学校法人福岡女学院、1961年）、『福岡女学院百年史』（福岡女学院百年史編集委員会編、学校法人福岡女学院、1987年、141頁）。
- <sup>10</sup> 前掲『福岡女学院七十五年史』70頁。

学校制服にみるスクールアイデンティティーの形成に関する一考察  
—福岡女学院を事例として— (井上)

- 11 前掲『福岡女学院七十五年史』104頁。この頃、高校では私服を着用するのは通学服として一定のものを届け出て使用することとなった。なお、高校については、戦後、制服の着用（生徒たちが一斉に制服を着用）がいつ復活したのか明らかな時期は不明である。
- 12 内田孝子「ウォーキングの効用」『福岡女学院時報』、第22号、1975年。福岡女学院同窓会100年史制作委員会『福岡女学院同窓会100年史』、福岡女学院同窓会、2016年、20頁。
- 13 藤川栄『斑入の龍舌蘭』私家版、1980年、17頁。なお、引用文中の“ミッション”とは福岡女学校のことである。このウォーキングについては、卒業生の回想にも度々登場する。波多江文字氏（昭和9年卒）は、「毎日2時間目の授業後ウォーキングの時間があり、制服を着て運動場で背筋を伸ばして歩く練習をしていたの。だから女学院の生徒さんは歩き方が爽快としてすばらしいと福岡では評判だったんです」（「毎日のウォーキングで爽快と！」『福岡女学院同窓会会報ぶどう』vol. 16、2010年、福岡女学院同窓会、2頁）と語っている。
- 14 「女学生の洋装姿福岡高女と女子師範が皮切り」『福岡日日新聞』、1922年2月5日。
- 15 前掲『斑入の龍舌蘭』、12頁。
- 16 前掲『福岡女学院百年史』、141頁。
- 17 前掲『福岡女学校五十年史』174頁。
- 18 福岡女学校の同窓生の話による。また、昭和3年に福岡高等女学校を卒業した後、福岡女学校の教員となった武田氏は戦時中の女学生たちは「制服に対する強い愛着と誇りから、先輩のお古などを工面して、何とか制服を着続けようと苦心したものである」（武田政子「制服のできたとき」『福岡女学院時報』、第16号、1972年）と回想している。また、戦前から福岡女学校の教壇にたち卒業生でもあった小野田よし子は「それは皆、制服にプライドをもっていました。戦中から戦後直後、食べること、屋根があること、そして生きていくだけで幸せだった時代でも、生徒たちは、先輩や親族らからお古を調達して、何とかセーラー服を着続けようとしました」（「福岡女学院セーラー服初の制服愛され80年」『読売新聞』2001年6月23日）と回想している。
- 19 創立記念日には生徒たちからメイクインを選びメイポールダンスをして創立を祝う行事は大正5年より行われている。
- 20 その存在の正確な時期は明らかではないが、戦前には白色のネクタイがあったという記述がある（前掲『斑入の龍舌蘭』、14頁）。
- 21 井口和子「初めて制服を着て」『福岡女学院時報』、第76号、1993年。
- 22 竹山郁子「すてきな一日始まる」『福岡女学院時報』、第76号、1993年。
- 23 松尾由紀子「新しい制服を着て」『福岡女学院時報』、第37号、1980年。
- 24 矢野敏子「制服を着て」『福岡女学院時報』、第64号、1989年。
- 25 「セーラー服ものがたり」『福岡女学院時報』、第46号、1983年。

<sup>26</sup> 前掲『福岡女学院七十五年史』49～50頁。

<sup>27</sup> 前掲『福岡女学院七十五年史』，49～50頁，前掲『福岡女学院百年史』，152～153頁。